

平和祈念信仰における観音像の研究

君島 彩子

本論文は、近代化や戦争といった社会の変化の中で「平和の象徴」となった観音像の形成過程および社会的役割を解明することを研究の目的とする。仏像には様々な尊格があるが、近代以降に制作された観音像には、ふたつの独自性が確認できる。まず寺院や墓地のように従来から仏像が設置されてきた空間だけではなく、公園などの公共空間にも「モニュメント」として建立されたこと。そして戦後には平和を象徴する存在として広く認識されるようになったことである。

これまで美術史学でなされてきた仏像に関する研究では、古代から中世の像を主たる研究対象とし、その造形的特徴の考察が重視されてきた。このため近世以降の観音像に関する研究は少なく、また近代以降は、主に彫刻家によって制作された観音像のみが「近代彫刻史」の中で論じられてきた。観音像がもつ象徴性や独自の信仰にまで踏み込んだ研究は少なく、近代以降に制作された観音像の独自性を明らかにするには、美術史学による探究のみでは不十分であった。このため本論文では、近代以降に制作された観音像の造形的特徴だけでなく、社会的背景や関係者の信仰、象徴性などを含む物質宗教学の側面にも配慮し、学際的かつ複合的な考察を試みた。

観音像は長い信仰の歴史をもつ造形物であるため、仏教教義や前近代の観音像にも留意しながらも、本論文では狭義の「美術作品」の枠に囚われることなく、個別の事例の検討を優先した。観音像の造形や素材、設置された空間を把握するため、フィールドワークを研究方法とし、発願者や制作者、開眼法要等の儀礼を行う宗教者などの関係者を特定し聞き取り調査を進めた。また観音像が発願された背景について、碑文、公的な記録、新聞記事などの文献資料をもとに地域史などと照らし合わせた。このような調査を通して複数の事例を比較研究し、モニュメントとしての観音像の形成過程及び「平和の象徴」という観音像の独自性について考察を深めた。

本論文は序論と結論をのぞき8章からなる。各章の構成は、1～3章が第1部、4～6章が第2部、7～8章が第3部となっている。第1部は、美術概念の導入や戦争といった社会的背景をふまえ、観音像が平和を象徴するモニュメントとなる過程を考察した。第2部は、平和を願う公共空間である広島・長崎・沖縄の平和公園に設置された観音像に求められた役割の比較検討を行った。第3部は、新しい思想と結びついた、観音像を中心とする平和活動について検討した。

1章では、近代以降に制作された観音像の造形的特徴を考察し、古仏から影響を受けた像、聖母マリアと重なる白衣観音像、仏像の装飾をもつ裸婦の仏像風彫刻という、「美術的」な価値観を反映した三つの造形の流れが顕著であることを明らかにした。さらに美術概念が反映された観音像は、「彫刻」として独自の展開を遂げ、「モニュメント」として定着したことを立証した。

2章では、戦時期、敵味方を問わない「怨親平等」の戦争死者慰霊の信仰により、観音

像が忠魂碑など他の戦争モニュメントとは異なる固有の性質を帯びるに至った実態を明らかにした。そして、戦時期の理念であった大東亜共栄圏を象徴する「興亜」から、戦後に新たに生まれた理想を象徴する「平和」へと観音像の象徴性が変化し、それとともに、あらゆる戦争死者を慰霊する「平和祈念信仰」が定着したことを論じた。

3章では、戦中期からバブル経済期の間建設された大観音像の事例を検討した。戦後の時間経過により、大観音像に対する戦争死者慰霊の信仰は薄れ、観光施設としての意味を強めた。だが、それでもなお「平和」のイメージが、大観音像の存続において重要であったことを明らかにした。以上、第1部を通し、平和を象徴するモニュメントとしての観音像の成立過程と展開を論じ、「祈りの対象としての仏像」と「社会的背景をもつモニュメント」という観音像における両義的な意味を具体的に示した。

4章では、広島市の平和記念公園に建立された《平和乃観音》を中心に考察を行った。原爆によって消えた中島本町のモニュメントである《平和乃観音》に対する祈りは、生き残った旧住民同士のネットワーク形成を促進した。さらに《平和乃観音》周辺には、旧住民たちの手によって、中島本町について地図や文字で解説したモニュメントが加えられ、原爆の記憶を継承する場が形成された。

5章では、長崎市の平和公園内の納骨施設に安置された複数の観音像と北村西望作《平和祈念像》の比較検討を行った。原爆死者慰霊において《平和祈念像》のみでは不十分と見做されたため、納骨施設には観音像が設置された。長崎市は観音像を「本尊」として祀ることで仏教的な死者の慰霊を重視してきた。このため観音像には「モニュメント」としての意味付けがなされず、結果として公共空間における存在意義が不明確となった。

6章では、沖縄県糸満市の平和祈念公園内に設置された山田真山作《沖縄平和祈念像》を中心に考察を行った。発願当初この像は、沖縄戦によって亡くなった犠牲者を慰霊する観音像であった。だが18年の歳月をかけてこの像を制作した作者の物語が知られるようになったことで、《沖縄平和祈念像》は普遍的な平和を象徴すると同時に、沖縄という地域を象徴する二重のモニュメントとしての意味を担うに至った。以上、第2部の事例検討を通し、平和公園における観音像は、戦争死者慰霊という信仰の対象としてだけでなく、地域史や戦争の記憶と結びつくことで、社会的役割をも担う公共モニュメントとしての役割も果たすことを立証した。

7章では、仏教による社会改革運動である「共生運動」に着目し、「共に生きる姿」によって平和を象徴する《平和観音》とその寄贈活動とを分析した。観音像は宗派を問わず信仰され、特定の仏教教義に縛られることがないため、《平和観音》には様々な宗派の仏教者が関わるのが可能となった。そして《平和観音》の寄贈活動は、複数の仏教者による平和活動をつなぐ役割を果たしたことを明らかにした。

8章では、アジア太平洋戦争の激戦地であった島々に「マリア観音」が建立されるに至った背景と、「マリア観音」を介した平和活動の可能性とを論じた。「マリア観音」は、カトリック信仰をも包含し、異なる信仰をもつ者が同時に祈ることが出来る場を生み出した。このような場は国際的な友好関係に貢献しており、新たな平和構築の礎となる事例があったことを明らかにした。以上、第3部では、「誰もが祈れる対象」である観音像を通じて、個別の宗教教義には縛られることのない平和活動への展開がなされた事例を論じた。

以上のように、平和を祈る目的で多くの観音像が作り出された社会的な文脈とその背景、

共同体におけるその役割の検討を通じて、近代に観音像が担った意味とその変遷を浮き彫りにした。造形物である観音像は、高度な仏教教義とは異なり、多くの人々が容易に理解できる信仰対象であったため、多様な信仰や思想を結びつける有効な媒体として機能した。本論文では、個人による祈りと社会的経験の共有によって、新たな思想や象徴の受け皿となり、社会状況に対応し変化しつづけた「観音像の近代」を具体的に跡付けた。それにより、「平和祈念」という新たな信仰を形成した観音像が、平和活動においてはたした役割を解明した。